

20世紀パリにおける緑地の 総体的変化に関する基礎的考察

佐々木 邦 博

信州大学農学部森林科学科空間利用整備学講座

Basic Study on the Aspect of Changes in the Open Spaces at Paris in the 20th Century

Kunihiro SASAKI

Laboratory of Landscape Architecture, Department of Forest Science,
Faculty of Agriculture, Shinshu University

Summary

This study aims to reveal the characteristics of the open spaces created every 10 years at Paris in the 20th century, and to understand the aspect of these changes in this era.

As a result, two turning points became clear.

The first is the period from 1921 to 1940. Many open spaces were created and formal design was adopted. These new parks were arranged more in the center of the city than in its neighborhoods.

The second is the periode from 1971 to 1990. Many open spaces were created especially in the neighborhoods of the city center. The new park design were diversified and it is difficult to find the main tendency.

Finally, this study revealed that the park design changed in the period when many parks were created.

(Jour. Fac. Agric. Shinshu Univ. 30 : 25-32, 1993)

Key words : Paris, park history, city planning

研究の目的

パリにおいて緑地が組織的に配置されるのは19世紀中葉のことである。ナポレオン3世が帝位についていた第二帝政期（1852—70）の間、セーヌ県知事オスマンはパリを近代都市として変貌させるために都市改造事業を押し進め、道路網、上・下水道網とともに都市に緑地

1993年4月12日 受付

を体系的に散りばめた。この緑地建設は責任者に任命されたアルファンにより進められるが、その特徴として、まず造られた緑地が面積により序列化されていること、そしてそれらが市内に均等に振り分けられていること、さらに緑地のデザインがほぼ同一であり、イギリス風景式庭園を踏襲していることが上げられる。これらの緑地は新しい都市文化を生み出していく舞台ともなった¹⁾。

20世紀に入ると公園がさらに建設されていく。特に近年の増加は著しい。そこで19世紀にアルファンにより確立された上記の特徴を持つ緑地システムは現在生き残っているのかどうかを探ってみたが²⁾、その均等配置の理念が住居から500m以内に公園が存在するように目論む現在の政策とつながる点があるというだけであった。

そこで本研究の目的は、まず手始めに、20世紀にパリで建設された公園がいかなる特徴を持つのかという点を10年単位で探求し、変化の大枠を把握しようとするものである。現在私が見える資料には制約があるが、基本的な大枠をつかむためには十分と考えられるので、その範囲内でこの期間の変化の概要を探っていく。

既存の研究としては1789年のフランス革命から現代までの約200年を5期に分けて特徴を求め、同時に緑地の場所を建設年代により色分けしているものがあるだけである。19世紀末や20世紀を細かく検討した研究を探したが、見あたらない。

研究の方法

現在までのパリの公園を記した資料は2冊出版されている。まず「パリの公園とプロムナード」³⁾だが、これは上記の本であり、大革命から現代までを5期に分け、解説を付し、いくつかの公園の図面をのせている。各時期の特徴を探ることを目的としているが、詩的とも受け取られる文で書かれている場合もあり、残念ながらわかりやすいものではない。2冊目は「パリの400の公共庭園ガイド」⁴⁾である。この本は現在パリにある緑地を一つずつ解説した本である。この2冊を詳細に分析していくことにより、20世紀の緑地建設の変化の特徴の大枠を把握していく。

結論と考察

1. 緑地数と総面積

1990年までに造られた緑地を建設年代別に集計した結果を表にまとめたのが表1である。1789年のフランス革命により王室庭園が一般開放されているので、1800年以前を最初のカテゴリーとした。次に第二帝政に至るまでの時期(1801-51)、そして第二帝政期(1852-70)とし、その後は10年ごとに区切っている。それらのカテゴリーごとに緑地数と総面積を集計し、またパーセントでも表示した。

まず緑地数を見ると、緑地が数多く造られた時期が3期あることがわかる。まず1852年から1880年にかけてであり、次に1921年から40年、そして1971年から90年にかけてである。総面積を見るなら、1852年から70年の第二帝政期に造られた緑地が圧倒的に大きく、全体の83.2%をも占めている。他の2時期の総面積も大きいですが、どちらも10%には達していない。

表1. 年代ごとの緑地数と総面積

年 代	緑 地 数	総 面 積	平均面積
1800 以前	8 (2.2%)	1186591m ² (5.2%)	148324m ²
1801～1852	2 (0.5%)	20147 (0.1%)	10074
1852～1870	29 (7.8%)	18966287 (83.2%)	654010
1871～1880	16 (4.3%)	312035 (1.4%)	19502
1881～1890	7 (1.9%)	27638 (0.1%)	3948
1891～1900	15 (4.0%)	58229 (0.3%)	3882
1901～1910	6 (1.6%)	13434 (0.1%)	2239
1911～1920	4 (1.1%)	36594 (0.2%)	9149
1921～1930	29 (7.8%)	144125 (0.6%)	4970
1931～1940	64 (17.2%)	395203 (1.7%)	6175
1941～1950	8 (2.2%)	42719 (0.2%)	5340
1951～1960	14 (3.8%)	85001 (0.4%)	6072
1961～1970	29 (7.8%)	177110 (0.8%)	6107
1971～1980	71 (19.1%)	542196 (2.4%)	7637
1981～1990	70 (18.8%)	801864 (3.5%)	11455
計	372 (100.0%)	22809173 (100.0%)	61315

注1) 緑地とは市民が中に入れて利用できる森、公園、庭園、プロムナードなどを指している。装飾用の植栽、あるいは墓地などは含まれていない。

注2) 過去における個々の緑地面積の拡大・縮小については不明な点が多く、正確に知ることができない。ゆえに次善の策として、すべて現在の面積を用いて緑地の一般公開年代ごとに計算した。よって実際とは若干ずれがあることをご容赦願いたい。

第二帝政期にアルファンにより造られた緑地の重要性がこの点からも改めてうかがい知れる。ところで、この巨大な総面積はパリの東西に広がる二ヶ所の森の整備によるところが大きい。緑地面積の80.7%をも占めるこれらの森を除いて考えるなら、1971年から90年にかけて緑地が多く造られていることがわかる。

全体を今一度俯瞰するなら、大革命により公共緑地が生まれた後、第二帝政期に緑地建設が大規模に進められている。そして20世紀には両大戦間と1971年以降に特に建設が推進されているのである。

2. 緑地の配置

次にこれらの緑地の配置を建設年代順にみていく。第二帝政期に計画された緑地が完成するのは1870年代のことだが、1880年の緑地配置図は図1にある。中心部にある広い緑地は大革命の時に公共緑地となった所が多いが、それら以外を見ても緑地は中心部に多く、しかもセーヌ右岸である北側により多く造られていることがわかる。1900年の配置図を見ても、やや数が増えているものの、やはり同様の傾向がうかがえる。

20世紀に入ると、1920年まではあまり多く造られてはいない。中心部とその北側にわずかに10ヶ所造られているだけである。

1921年から40年までが緑地建設の第2のピークをなしている。1940年の配置図を見ると、

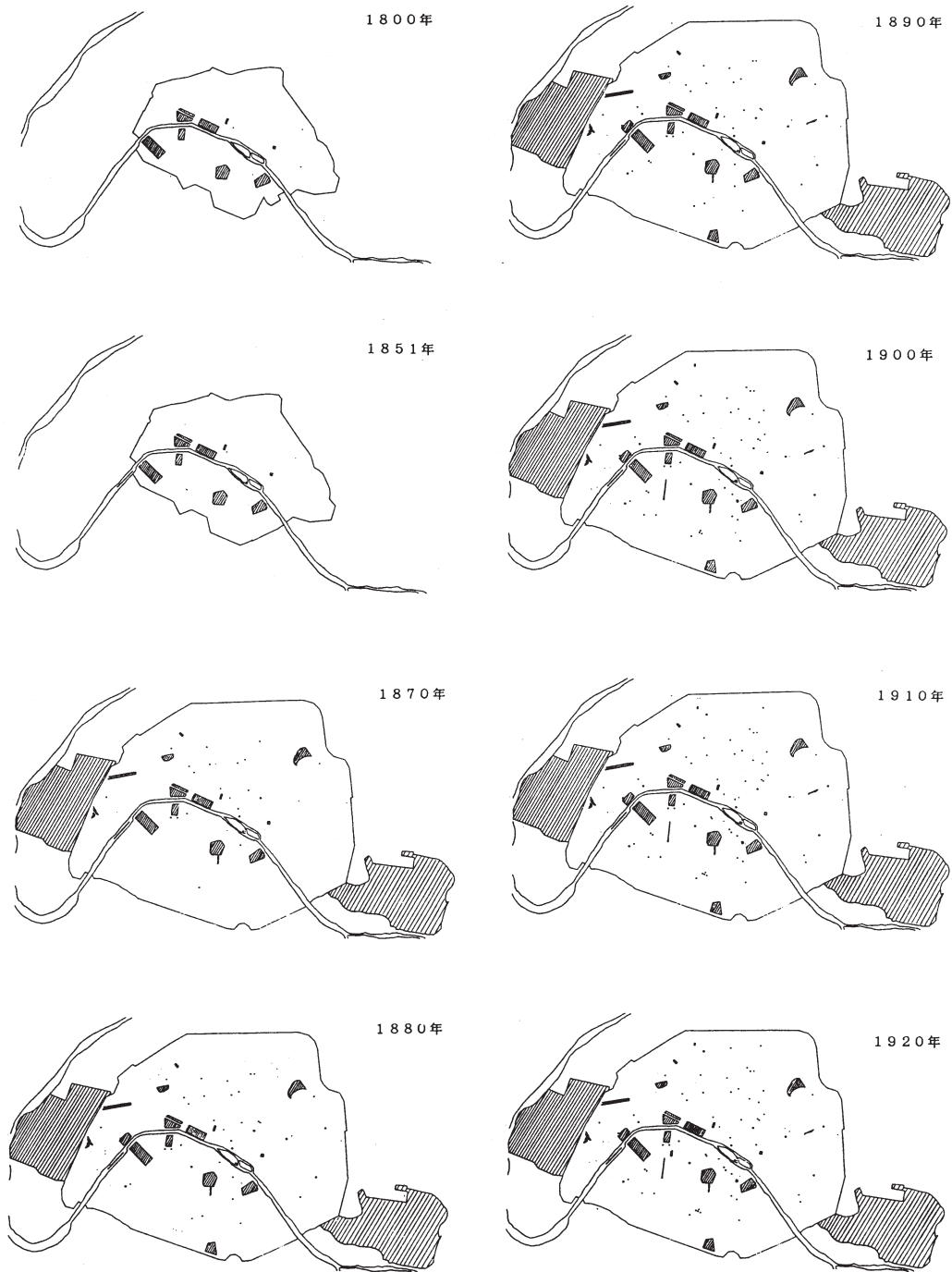
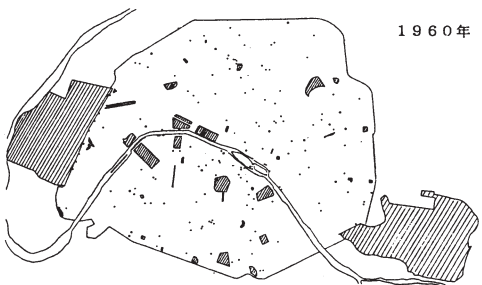
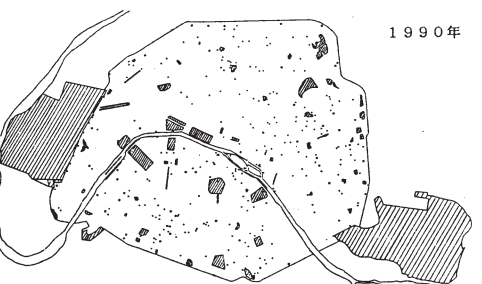
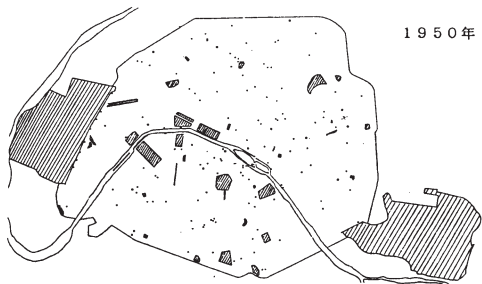
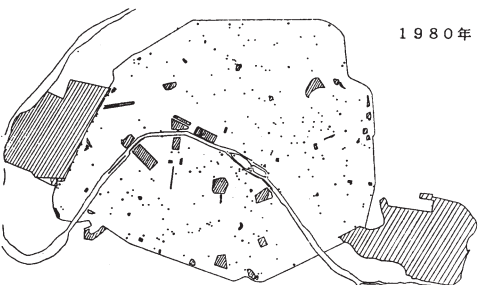
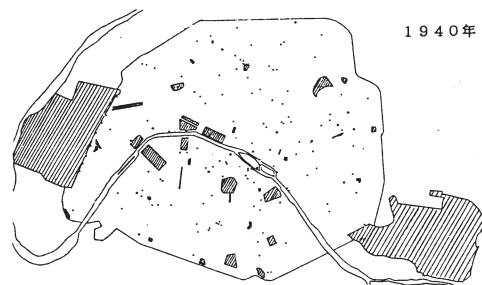
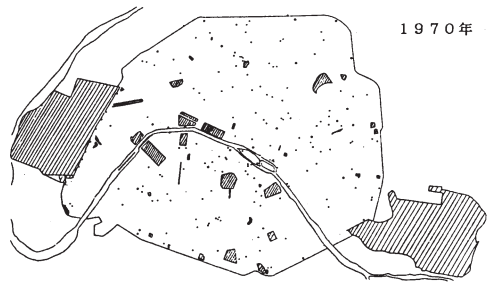
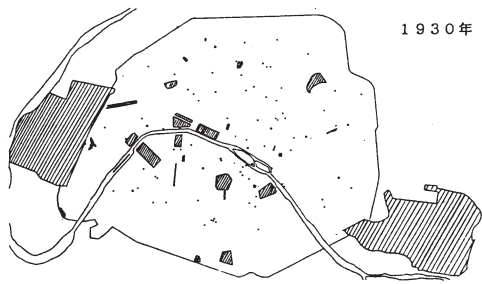


図1. パリの年代別緑地配置図



凡 例

斜線は1 ha以上の緑地を、黒丸は1 ha未満の緑地を表わす。

それまでは少なかったパリの周辺部においても緑地建設が進められていることが明瞭であるが、同時に中心部においても進められていることも際だっている。その結果、全体的に見ると緑地はやはり中心部により集中しているのである。

その後、1941年から60年にかけては緑地はあまり建設されていない。周辺部に少し建設されているだけである。1961年から70年にかけては特にセーヌ右岸にそれが集中している。

1971年から90年にかけては緑地建設の第3のピークを形づくるほど数多く造られている。中心部においても建設されているが、より多く造られているのは周辺部の東部と南部である。これは再開発が進められている地区と同一であり、再開発の際に緑地が計画的に造られてきたことを物語っている。1990年の緑地配置図を見ると、市内にほぼまんべんなく配置されているとはいえ、東部と南西部が特に多く、西部と南東部は比較的少ないことがわかる。このアンバランスは今説明したように近年の再開発事業による所が大きい。比較的少ない南東部は現在再開発事業が進行中であり、今後緑地が確実に増加することが予想される地区である。また西部だが、この地区は良質な住宅（マンション）街であり、民有地の中に樹木も多く、緑地を造る必要性にそれほど迫られていない地区と言えるし、また再開発計画もこのような理由により少ない。それゆえに結果として公共緑地が少ない地区となっていると考えられるのである。

3. 緑地の名称と面積

第2帝政期に初めてパ리에緑地が組織的に配置されたとき、緑地はその面積に応じて森 (bois)、公園 (parc)、スクウェア (square) の3段階に分類され、称されていた。この時分庭園 (jardin) とは建築物に付属した緑地を指している。本来私的な緑地であるが、それが開放されて公共空間になった場合でもこの名称が引続き使われている。このカテゴリーわけによる名称はおよそ1950年まで維持されている。その後、新しく造られた緑地に対して庭園という名称をつける場合が増加し、その面積も大きくなり、建物に付属しない緑地を指す場合も多くなっていく。そして1971年から80年にかけて造られた緑地の名称では庭園とそれまで多かったスクウェアの数が逆転し、1981年から1990年では庭園の方が圧倒的に数が多くなっている。問題は誰が緑地の名称を決定するかという点だが、パリ市役所によると設計者に任せているということであった。設計者の意識が変化しているのであり、庭園という言葉の方に近年特に魅力を感じているということである。すなわちスクウェアよりも庭園の方がより個性を感じさせる言葉なのであり、また生活との親密さをうかがわせる言葉として好まれているのである。ゆえにこのカテゴリーは1951年から1960年にかけて大きく崩れ始めるといえるのである。

20世紀に顕著に現れてくるもう一つの点は、名称の多様化である。庭園以外にもプロムナード (promenade) やマイユ (mail) が現れてくる。プロムナードとは河川敷などに造られる細長い緑地のことであり、マイユとは並木道を意味しているが緑道といった空間である。これらは特に1970年頃から造られ始め、パリの緑地に彩りを添えているが、緑地が造られる敷地の多様化がその背景にあると考えられる。

次に緑地面積だが、表1の平均面積を見ると大きい時期と小さい時期があるが、緑地造りに積極的だった時期が必ずしも平均面積が大きいとは言えないことがわかる。このような中で1981年から90年にかけての時期は造られた緑地数も多く、また平均面積も大きいので、緑

地造りに特に積極的に取り組んだことが判明するのである。

4. 形態

さてこれらの緑地のデザインの変化だが、変化する時期は2期にみられる。アルファンによる穏やかな自然風景というデザインが変化するのは1921年から40年にかけてのことである。それまで省みられなかった整形形式のデザインが復活した。この時期に設計されたスクワール・ド・ショワジーやスクワール・ルネ・ル・ギャルは整形形式のデザインが用いられており、これらより広いケレルマン公園やスクワール・ド・ラ・ピュット・デュ・シャポー・ルージュは曲線主体のデザインの中に軸線を通すという折衷案が用いられている。この時期にはこのようなデザインの緑地がパリ中に配置された。当時の芸術はアール・デコ（装飾芸術）と呼ばれ、直線を用いるデザインが流行しているが、この傾向との密接な関係が示唆されるのである。

次に変化するのは第二次世界大戦後から現代に至るまでのことである。戦後の造園史は未だ総合的に研究されておらず、満足に把握されてもいないのが現状であるが、特に最近いろいろな傾向が生じていることは確かである。幾何学的なデザインを求める傾向や自然風景を求める傾向ばかりでなく、庭園で用いられてきたいろいろな要素を集めてみたり、また簡素で単純な構図が求められてみたり、あるいは造形的なデザインが用いられたりしている。すなわち主流をなす傾向は存在せず、多様性が生じ、傾向は分散しているのである。これにはいくつもの理由があるだろうが、現代社会が持つ多様性を背景にしているのは間違いないと考えられるのである。

5. まとめ

以上のことから、20世紀にはパリの緑地に関して転換点が2期あったことがわかる。まず最初の転換点は両大戦間である1921年から1940年にかけてである。緑地も数多く建設され、整形形式のデザインを取り入れた設計が主流となる。しかし緑地が造られた場所は比較的に中心部に多く、周辺部にはまだまだ広がってはいなかった。また19世紀の緑地システムはデザインと均等配置の理念においてこの時に崩壊したといえ、この意味でも転機であった。

第2の転換点は1971年から1990年にかけてである。この時期はパリ市長職の復活を契機に緑地建設のピークをなしており、その平均面積も少し増えている。そしてパリの中心部ばかりでなく周辺部にも多く建設された。また、これは第二次世界大戦後から始まることなのだが、デザインが多様化していく時期なのであり、同時に19世紀から存続していた緑地の名称のカテゴリーが崩れる時期でもあるのである。

最後にだが、このように緑地が数多く建設された時期にはデザインも変化していることが判明するのである。

要 約

本研究の目的は20世紀にパリで建設された公園を10年単位に区切った後にその特徴を探り、変化の大枠を把握することを目的としている。

その結果明らかになったことは、20世紀には転換点が2期あったことである。

最初の時期は1921年から1940年にかけてである。緑地が他の年代よりも数多く建設され、

しかも以前とは異なり、整形式デザインを取り入れた設計が中心となる。新しい公園が建設された場所は市の中心部に多く、周辺部に建設されることは少ない。

二番目の時期は1971年から1990年にかけてである。この時期も最初の時期と同様に緑地建設が盛んであり、しかも市の周辺部に数多く建設されている。また新しく建設された公園のデザインは多様化しており、主流と位置づけられる傾向は見いだしがたい。

最後に明らかになった他の点だが、緑地建設が盛んになる時期にはデザインも変化しているという関係も判明したのである。

キーワード：パリ，公園史，都市計画

引用文献

- 1) 佐々木邦博 (1988) : オスマンのパリ改造計画における緑地計画の理念及びその実態について, 造園雑誌, 第51巻第5号, pp. 43-48.
- 2) 佐々木邦博 (1992) : パリの20世紀の, そして現代の公園について, 平成4年度日本造園学会 関西支部大会プログラム及び研究発表要旨, pp. 11-12.
- 3) Le Dantec, D. et al (1989) : Parcs & Promenades de Paris, Les Éditions du Demi-Cercle.
- 4) Barozzi, J. (1992) : Guide des 400 Jardins Publics de Paris, Éditions Hervas.